

死ぬな殺すな殺されるな

今週で夏季講習も終わり、ようやく夏休みとなった。まずもって諸君に感謝したい。今日までの学校活動は諸君とその保護者の協力あってこそ継続できた。ありがとう。そして二学期も共にこの危機を乗り越えていく同志であることも確認しておきたい。さて、すでに8月。職員室の壁に貼られた年間行事予定表には「オリンピック観戦（学校招待）」の文字。残念ながらその世界は消えてしまった。まるでパラレルワールドに迷い込んだようだ。COVID-19のなかった方の世界で、高校生の君は武蔵野の森でバドミントンを、中学生の君は有明テニスの森でテニスを観戦している。クラスメイトと肩を寄せ合い、大声で声援を送る君がそこにいる。

諸君の生きるこの世界で起きつつあること、起きるであろうことを自戒も込めて話しておきたい。まずは「自由と不要」という視点。マスクの着用、外出の制限、ソーシャルディスタンスの確保等々、もう随分と長い間、諸君は不自由な生活を強いられている。この不自由を感じないためにはどうすればいいのか。様々な選択肢を予め不要なものとして捨ててしまえば良い。手を繋ぐこと、顔を寄せ合って笑うこと、肩を組み大声で歌うこと。スタジアムでスポーツを観戦すること、ライブハウスで熱狂すること、美術館に行くこと。生きながらえることをのみ求めるならば、それらは不要なものだ。我々はもうすでに多くのものを不要と断じて捨てていないだろうか。人として生きるのに大切なものまでも。そして、もう一つの視点は現在の危機が生物学的危機であるということ。生物学的危機は民主主義の手法では解決できない。「支配と監視」が最も有効な手法となる。そこで、生き延びることのみを求めるならば、人々はテクノロジーとシステムで行動を抑制されることを自ら求めるようにさえなるだろう。こうして生物として生きることのみを徹底的に追求し、不要とされるものを削ぎ落としていけば、そこには人ではなく「動物」としての剥き出しの人間が出現する。いや、不自由という感覚さえ無くし、支配と監視の世界に生きていただけならば、それは動物でもない。家畜だ。

4月、諸君には「死ぬな（感染しない）殺すな（感染させない）」というメッセージを送った。今日、もう一つの言葉を送ろうと思う。殺されるな。世界がどのようなものであろうとも、人として豊かに生きることを諦めてはいけない。

新渡戸文化中学校・高等学校 校長 小倉良之

2020年8月8日 土曜日